

The Last of
The Kampfgruppe VII

ラスト・オブ・
カンフグルッペ

VII



高橋慶史

Takahashi Yoshifumi

はじめに

『ラスト・オブ・カンパフグルツペ』のシリーズも、第VII巻の発刊を迎えることとなりました。これも読者の皆さんの温かいご支援があつてのことであり、この場を借りまして心から感謝する次第です。

翻つてみると、正巻（第I巻）が発刊されたのは2001年のことであり、もう18年前のことでもあります。

その当時、8歳と6歳であつた息子たちはすでに社会人となり、筆者自身も長年働いた会社を離れ、サラリーマンとして新たな仕事に取り組んでいます。

その一方で、戦史研究の将来は不安に満ち溢れています。

書籍の発刊は激減して良書が駆逐され、出典もあやふやなWeb情報が跳梁跋扈している状況です。また、日本では戦史研究を行なう年齢層がますます高齢化しており、恐竜のように絶滅寸前と言わねばなりません。

そして筆者も63歳となり、いよいよ体力の衰えや集中力の欠如を実感しつつあります。

最近、とある博物館において旧ドイツ軍のIII号突撃砲とIV号戦車に出会うことができました。この2両は第二次大戦末期にフランス軍に鹵獲され、その後、ヨルダン軍に売却されてトーチカとして第二次中東戦争（第三次の説あり）で実戦投入され、イスラエル軍に鹵獲されるという数奇な運命を歩んだ戦車です。

そして砂漠で元氣な老後（？）を送る彼らの姿は、筆者にこれからも戦史研究の世界で頑張ろうという気構えと勇気を与えてくれました。

もとより、無名の戦闘団が最後まで自分の義務を果たすべく奮闘するという本シリーズのテーマは不変であり、日本のサラリーマンにその姿を重ねる筆者の思いも変わりません。従いまして、今後とも読者のご声援をよろしくお願いいたします。

The Last of The Kampfgruppe VII

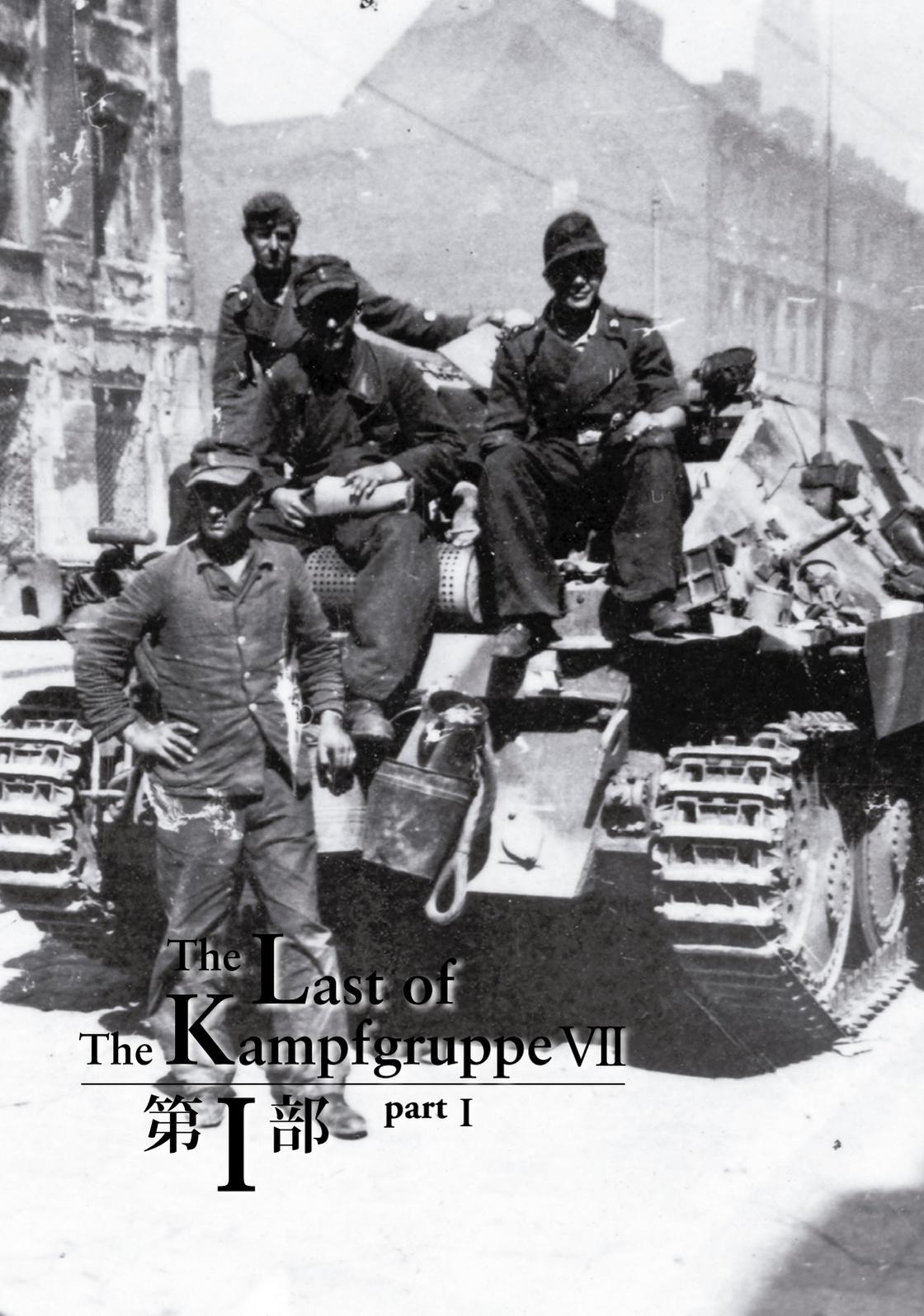
目次 CONTENTS

第I部 ————— 3

第1章	バルト海三島の戦闘 [勇躍編 1941年秋] —————	5
第2章	バルト海三島の戦闘 [流血編 1944年秋] —————	43
第3章	武装SSの奇形 ディルレヴァンガー伝説の真実 [SS第36武装擲弾兵師団] —————	91

第II部 ————— 151

第4章	潜水戦車師団浮上せず [第18戦車師団] —————	153
第5章	野砲120門の一斉射撃 [第18砲兵師団] —————	205
第6章	犀の雄叫び [第88重戦車猟兵大隊] —————	241
第7章	灰色熊の咆哮 [突撃戦車の戦い] —————	287



The Last of
The Kampfgruppe VII

第 I 部 part I

第I部

第1章

バルト海三島の戦闘

——勇躍編 1941年秋——

ピークを過ぎたと言われながらも一向に衰える気配もない“艦これ”ブームですが、筆者も旧日本海軍の艦艇については人並みの知識は持ち合わせていますし、特に松型駆逐艦や海防艦、工作艦、水上機母艦などは大好きです。そして、“ラスカン魂”の発露はここでも抑え切れないと申しますか、なかでも、神鷹や海鷹、大鷹などのような小型改装空母なんかは「無理やり感」があって良いですね！

さて、翻ってドイツ海軍はと言うと、大型艦艇も通商破壊作戦に投入されたということもあり、戦艦ビスマルクによるイギリス巡洋戦艦フッド撃沈などを除けば輸送船団を相手にした地味な戦闘であり、イマイチ魅力に欠けます。

しかしながら、掃海艇、駆潜艇、高速ボート、警備艇、哨戒艇、輸送フェリー、武装漁

船、突撃ボートなどといった雑多な小型船艇については、個人的に大いに興味をそざられます。特にこれらの小型船艇は鹵獲された外国製のものも多く、型式や形状、大きさも様々であり、改造されて沿岸警備やパトロール、輸送・連絡、哨戒任務、上陸任務などに投入されました。

そこで、ついに7巻目となった『ラスカンVII』の輝かしい第1章は、大戦初期の東部戦線・バルト海の島々で行なわれた、“ドイツ軍による知られざる上陸作戦”をご紹介します、併せてこれらの小型船艇の活躍の一端もお伝えしようと思います。

珍しいドイツ軍による島嶼上陸作戦を、是非、お楽しみください！



1941年7月1日、ラトヴィアの首都リガを占領したドイツ軍は、解放軍として市民から熱狂的な歓迎を受けた。写真は7月7日に撮影されたもので、真っ先に入城した第1歩兵師団または第291歩兵師団の兵士たちであろう。(BA Bild 183-L19397 (unknown))

1 1941年8月 北方軍集団の状況

1941年6月22日に発起されたバルバロッサ作戦により、第4戦車集団、第16軍、第18軍を擁するドイツ北方軍集団は、瞬く間にバルト三国を席卷し、8月中旬には遙カルガ河まで進出していった。レニングラード(サンクトペテルブルグ)まであと100km!

しかしながら、あまりの進撃の速さに補給路や補給拠点の構築が追いつけず、北方軍集団は慢性的な補給不足に悩まされており、バルト海経由の港湾および海上補給路が何としてでも必要であった。エストニアのタリン(レヴァル)港の存在はこれを一挙に解決するはずであったが、包囲されたソ連軍が頑強に抵抗しており、これを掃討したのが8月28日になつてからのことであった。

これにより北方軍集団は、ようやく前線近くに大規模な補給拠点を獲得こととなったが、事はそう簡単ではなかった。

なんととなれば、ソ連陸軍およびバルト艦隊の一部は、エストニア本土の西岸地域と西方10〜20km沖合にある要塞化されたムフ(モーン)島、ヒーウマー(ダーゲ)島、サーレマー(エーゼル)島に立て籠もり、戦闘を継続していたのである。これを排除しない限り、ドイツ本国からタリンまでの海上補給は確保されず、レニングラード攻略も絵にかいた餅であった。(*)

北方軍集団はクールラント半島のベンツピルス（ヴィンダウ）からサーレマー島南岸へ上陸する作戦「ベールオヴルフⅠ」、エストニア本土からムフ島を經由してサーレマー島東海岸へ上陸する作戦「ベールオヴルフⅡ」を立案した。前者はサーレマー島の中心地であるクレサーレ（アレンスブルク）を一挙に占領できる点で有利であったが、海上航行距離が長いため使用できる艦船も限定された。後者は正攻法で奇襲要素はないものの海上輸送距離が短く、艇や小型船、工兵用軽突撃ボートも使用可能であった。

検討の結果、北方軍集団は後者を採用することとし、使用兵力を次のように決定した。この上陸作戦「ベールオヴルフⅡ」は、規模は小さいながらも、第二次大戦におけるドイツ軍の陸海空三軍の協同作戦による初の本格的な島嶼上陸作戦であった。ちなみに、ベールオヴルフ（ベールオヴルフ）とはイギリスにおける最古の伝承叙事詩の主人公の名前である。

◎陸軍…1個歩兵師団

◎空軍…2個爆撃団、2個戦闘機団、1個降下猟兵大隊、1個高射砲連隊

◎海軍…1個海軍輸送船団、1個護衛船団

一方、ソ連海軍は以下の部隊が展開していた。

◎本土西岸・パープサル…掃海艇

◎サーレマー島

南岸・クレサーレ…駆逐艦、高速ボート
南岸・コイグステ…高速ボート、警備艇
ソルヴェ半島・ムントウ…高速ボート
西岸・キヘルコナ…潜水艦
西岸・トリイギ…駆逐艦、潜水艦、掃海艇
西岸・パピサール…水上戦闘機基地

さらにサーレマー島に約1万2000名、ヒーウマー島に約7000名、ムフ島に約1000名のソ連陸軍部隊が展開し、これとは別に海軍陸戦隊が約5000名ずつサーレマー、ヒーウマー両島に配置されていた。空軍については25機程度の旧式機が島の各飛行場に分散していたが、脅威とはならない見込みであった。

なお、ソ連海軍のバルト艦隊は、戦艦2隻、巡洋艦3隻、駆逐艦41隻、魚雷艇6隻、高速ボート110隻、潜水艦96隻を擁しており、一見すると強力な打撃力を有していたが、主力艦の喪失は避けるようスターリンから厳命されていた。さらに低速な旧式艦艇が多く、少なからぬ乗組員が離艦してレニングラード防衛戦や陣地構築作業などに駆り出されており、制空権のないエストニア海域へ大挙して出撃する状況にはなかった。（*2）



1941年9月の長雨のなか、ラトヴィアの街道を東へ向かう第42軍団所属の第442軍団通信大隊の縦隊。一番左端の車両はヴァンデラー W23S型（6気筒 / 2700cc / 62馬力）で、車体後部の増設ラックには、大隊マークの「銀色の輪に黒い猪」が確認できる。

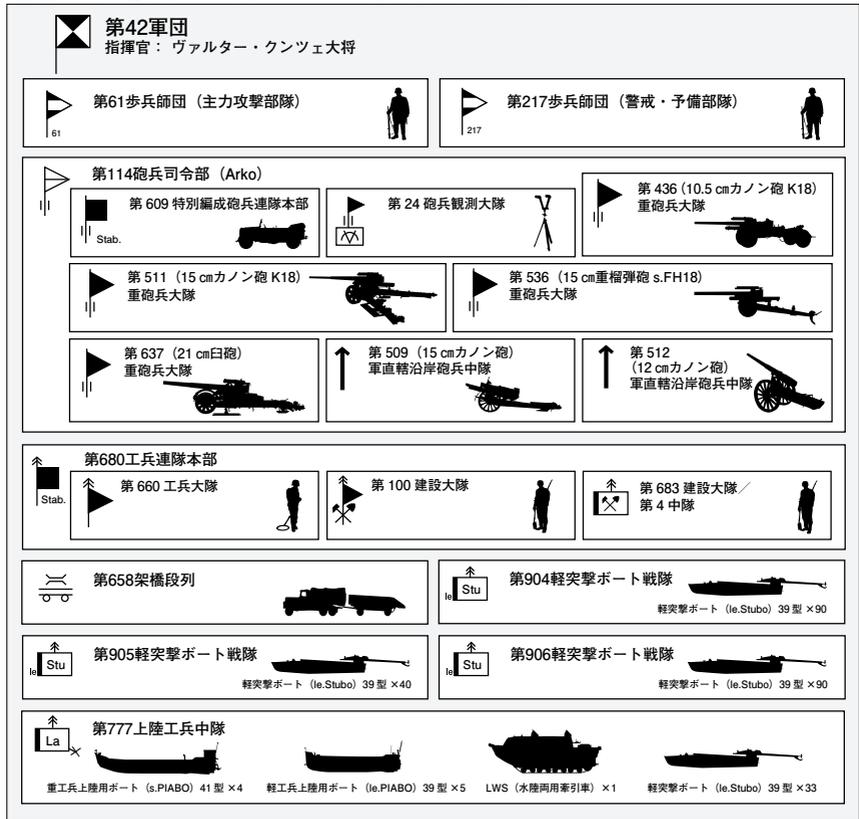


第42軍団の軍団マーク。シルバーの円のなかにシルバーの牙をもつ黒い猪を象ったもので、軍団参謀長のハインツ・ツイーグラー大佐による発案と言われている。軍団所属の通信大隊をはじめ各部隊も臨時配属以外は常時使用した。

2 上陸作戦「ベーオヴルフィ」

北方軍集団はこの上陸作戦のために、工兵出身のヴァルター・クンツェ大将率いる第42軍団を起用し、主力攻撃部隊を第61歩兵師団、警戒・予備部隊を第217歩兵師団として、次に示す編成図1-1および同1-2のような部隊を集結させた（空軍は省略）。（*3）

編成図 1-1 上陸作戦“ベールーフ II”の作戦部隊① 1941年9月



海軍部隊

オストゼー護衛艦隊司令部



軽巡洋艦“エムデン”



軽巡洋艦“ライプツィヒ”



軽巡洋艦“ケルン”(後に増強)

海軍司令部 C(試験戦隊“オストゼー”)

司令艦艇



司令艦艇(艦種不明)×1

第128フェリー大隊



ジーベル型フェリー×26



海軍掃陸用舟艇(MFP)×12



艇(はしけ)×3



モーターボート×20



沿岸エンジン付帆船×13



兵器搭載型海軍掃陸用舟艇(MFP)×7



煙幕発射ボート



曳き船×11



補助艦×4



蒸気船×1



タンカー×1

海軍司令部 D



武装漁船(KFK)×34



艇(はしけ)×4

掃海艇司令部“ノルト”／魚雷艇司令部“リーバウ”

第1掃海艇隊



第1機雷探索艇隊



第1掃海艇隊



第3魚雷艇隊



第4魚雷艇隊



駆潜艇×3

フィンランド海軍部隊



海防戦艦“ヴァイナモイネン”



海防戦艦“イルマリネン”



ハトロールボート×4



機雷敷設艦“フルマー”×1



曳き船“タイフーン”



曳き船“モンズーン”



砕氷船×2



武装汽船ほか

特殊部隊

La

上陸コマンド部隊:連隊
“ブランデンブルク” / 1個中隊



z.b.v

降下猟兵コマンド部隊:
特別戦隊“ベネシュ”
(連隊“ブランデンブルク” / 第16中隊)





1940年8月から9月にかけてベルギー／オステンデのハーン海岸で撮影された第100（火焰放射）戦車大隊／第3中隊の水陸両用牽引車LWS“299”号（手前）とLWS“300”号（後方）。車体右側にはまだ「Wa.Prüf5 IVb（兵器試験第5部IVb課）LWS 299」という陸軍兵器局所属時の表記が残されたままである。

3 LWS（水陸両用牽引車）

非常に興味深いことに、第42軍団へ支援部隊として配属された第777上陸工兵中隊は、LWS（ラントヴァッサーシュレツパー…水陸両用牽引車）1両を装備していた。

LWSは世界で初めての水陸両用トラクターであり、元々は2両ひと組でパンツァーフエリー（装甲戦車運搬フェリー）を構成し、IV号戦車1両を海上輸送してそのまま上陸する目的で開発された。開発は1935年5月に開始され、ラインメタル・ボルジツヒ社により少なくともプロトタイプ2〜3両が1939年前半までに完成している。

その後、1940年8月からデンマークのジルト島においてプロトタイプ3両が、イギリス進攻作戦「ゼーレーヴェ（あしか）」のための各種試験運用に供用された。

この結果、戦車の運搬は同じコンセプト（双胴型）で非装甲のジーベル型フェリーが行なうこととなった。大型で非武装のLWSは、敵砲兵の格好の目標となることから非常に制限された運用しかできなかったのである。しかしながら、大型無線装置やスタップルームを有し、砂浜で擱座した戦車の牽引が可能であることから、上陸初期段階での指揮車両として運用することとなり、量産されることとなった。

当局担当者が、生産継続の予算確保のために針小棒大の報告



前掲の写真に続くカットで、LWS “300”号の詳細が良くわかる。ネズミと四角い箱のマークは、牽引するLWSをモチーフ化したという説や兵器試験第5部IVb課に由来したマークなどの諸説がある。海軍仕様のライトグレーとダークグレーの二色迷彩が施されている。

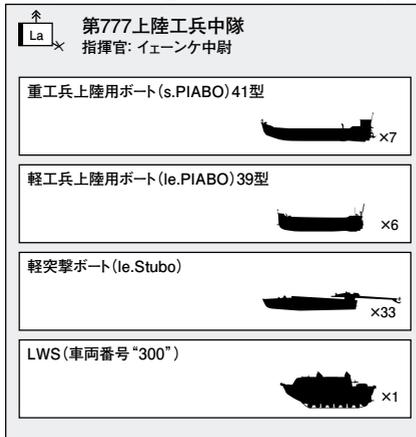
装備表1-1 水陸両用牽引車LWSの性能諸元

LWS(水陸両用牽引車)	
車両重量:	16(15?)t
車両寸法:	長さ9,200×幅3,050×高さ3,150mm (同9,000×3,000×3,150mm)
エンジン:(名称)	マイバッハHL120TRM
(形式)	V型12気筒ガソリンエンジン
(最高出力)	300馬力/毎分3000回転
最高速度(陸上):	40km/h
最高速度(海上):	12.5km/h=6.75ノット
最大牽引重量:	30t
最大積載重量:	2.5t
航続距離(陸上):	240km
航続距離(水上):	80km
	*注)括弧内はプロトタイプ

第777上陸工兵中隊は、1941年8月にディーフェノウにおいて編成された。初期の装備は、編成図1-3のとおりである。(＊5)

書を必死で作成する姿が目に見えかぶようである(笑)。LWSの性能諸元は別表のとおりであるが、走行機構に38(t)戦車のリーフスプリング(板バネ)、II号戦車の誘導輪などが流用されているのも特徴のひとつであろう。なお、総生産数はプロトタイプも含めて21両というのが定説であるが、いずれにせよ最大でも21〜23両であり、そのうち19両の存在が写真で確認されている。(＊4)

編成図1-3 第777上陸工兵中隊の編成 1941年9月



LWS「300」号については、当初、LWS「299」号とともに第100戦車(火焰放射)大隊に配属され、ベルギーのオーステンデにおいて試験を行なったのちに第777上陸工兵中隊へ配属されたものである。

これ以降、同中隊は試験戦隊「オストゼー」に属してヴォリン島で訓練を行なった。その後、9月3日〜9月10日にかけてシュヴィーネミュンデからリガへ輸送され、9月15日までに軽工兵上陸用ボート(le.PIABO)39型に積載されてハーブサルへと海上輸送された。

そして1941年9月16日、LWS「300」号はムフ島西岸のランナ付近へ上陸して初陣を飾った。さらに翌日には

西方の小島であるコイナスト島へ上陸し、短時間の戦闘後に島を占領することに成功した。

筆者が知る限り、水陸両用車両が海上からの上陸作戦時に実戦投入されたのは、ムフ島上陸作戦が史上初めてのことである。

その後、LWS「300」号はいったん本土に引き揚げられたが、9月23日に再び出撃してベンツピルスから輸送船で輸送され、9月24日にサーレマー島のキュデマ湾に上陸し、10月9日まで第61歩兵師団の一部と上陸演習を実施。さらに10月11日にはヒーウマー島へ第161偵察大隊の輸送任務に就いている。(＊6)

4 第61歩兵師団

上陸作戦「ベーオヴルフII」の主力攻撃部隊たる第61歩兵師団は、1939年8月8日付で演習師団としてインスタールクで編成が開始され、8月26日付で第2期編成波の正規歩兵師団となったものである。ポーランド戦役ではムラワ、プウツク方面に投入され、西方戦役においてはエバン・エマエル要塞、ついでダンケルクへと転戦した。

そして、1941年6月22日のバルバロッサ作戦発起後は、メーメル(クライペタ)付近から国境を越えてリガ方面へと進撃し、8月17日にはナルヴァに達した。その後、タリン攻略戦のために引き抜かれ、僚友の第254、第217歩兵師



二級鉄十字章を授与されて得意満面の将校（少尉？）。後方のポルクヴァルト社製カプリオレの後部には、第61歩兵師団の新旧師団マークがコントラスト鮮やかに描かれている。1942年夏頃の撮影と思われる。

団とともに激戦を展開し、ようやく8月28日にエストニアの首都タリン（レヴァル）を占領することに成功したのである。（*7）

師団長のフリードリヒ・ヘーニッケ中将は、コンスタントア生まれの44歳。第一次大戦では第49歩兵連隊／補充大隊長（大尉）として奮戦し、1918年6月14日付でプール・メリット勳章戦功章を授与されている経歴豊富な野戦指揮官であった。（*8）

なお、ヘーニッケは上陸作戦中の1941年9月17日付で騎士十字章を授与されているが、プール・メリット勳章

戦功章と騎士十字章を合わせ持つ授与者はきわめて数少ない。空軍ではゲーリング、ウーデット、オスターカンプ、グライムなど、陸軍ではロンメル、シエルナー、ブッシュ、ボックなど綺羅星のごとき将官であり、そのなかで地味なヘーニッケは、ある意味で異彩を放つ存在であろう。

第61歩兵師団の1941年5月3日現在の師団編成定数は次ページの編成図1-4のとおりであるが、1941年9月の時点では、空軍の軽高射砲部隊が増強され、砲兵連隊の一部は突撃ポルトに搭載可能な山砲などに装備変更されているので注意が必要である。（*9）なお、参考として師団編成当時の兵力および装備を装備表1-2に示す。（*10）



第61歩兵師団の師団マーク。師団編成地がインスターブルクであったことから、オストプロイセンの国章に因んだ胸当てをデザイン化したとする説やドイツ騎士修道会の十字架の盾という説がある。



9784499232609

ISBN978-4-499-23260-9

C0076 ¥4300E



1920076043000

定価 (本体 4,300 円+税)



The Last of The Kampfgruppe VII